

II 田園都市としての黒埼町

黒埼町の現状を分析して、黒埼町の将来の望ましい姿を考えるとすれば、都市と農村の共存する、「田園都市」としての黒埼町という考え方ができる。

八十一年の歴史のうち六十一年は、農村社会の生活原理の歴史であったと言つてよいが、「大野町」という徳川末期には「市」の開かれる在郷町として生成発展して来た人口集中地域もあった。この「大野町」は背後の近郷農村、消費人口なしでは成立しないのであるから、「大野町」も農村社会という大かっこの中にくることができると

（それが、「大野町」とか、在郷もん」というような習慣になつてきた。今も、そんな気分があるとするは、まさに時代錯誤である。）

今までは、「大野町」という若干異質の、商人的感覚、はあつたにしても、農業、農村、農民の利害による単一の生活原理で推移することができた。（できたと言つても、それは黒埼町としてまとまったというよりも、さらにそのなかの部落、字の単位でまとまり、その連合体のようなものであつた。）

しかし、最近二十年の歴史の黒埼町は、人口、産業別人口、土地

利用、交通、教育、自治会とあらゆる点で、今までの農村社会の単一の生活原理では律つきれない都市的要素（より具体的に新潟的色彩）と農村的要素が混在して、複数の生活原理が支配している。

この時に将来を見通すと黒埼町には都市的要素と農村的要素が同時に存在するであろう。都市が発達するにしても、新潟市自体は飽和の状態にあり、周辺町村に依存する。特に住宅、生産面で郊外に指向するだろうし、黒埼町はもともと近距離にあり、そのエネルギーが浸透するであろう。このエネルギーは阻止するよりも迎え入れることが得策である。しかし、これを無計画に受け入れるならば、

これからの※1人口推計からしても昭和六十年代で二万七千人、三万二千人前後、三十年後の昭和八十六年（西暦二〇一二年）で二万八千人、三万五千人前後と予想される。おおよそ三万三千人規模の町が考えられる。

減反政策が行われているにして、日本の食糧生産の必要がないという時代はあるまい。※2兼業農家が增加するにしても、その労働力の指導を誤らず、農業振興地域は明確に確保しておく必要がある。「田園に都市の活力を、都市に田園のゆとりを」もたらしめるのが、田園都市であるとするは、黒埼町にそれができるのである条件を備えている。

都市と農村が対立するのではない。融和し一体となることである。ましてや、「大野もん」だとか、「在郷もん」だとか、「〇もん」という部落根性から脱脚しなければならぬ。そんなことにこだわっていると、ますます時代の流れからはずれてしまふ。

現代社会は都市化を急ぐあまり、都市は、新潟は、人間にとって必要な「むら」を「農村」を「緑」を放逐してしまつた。黒埼町は、やや虫食いの状況がみられるが、今のうちに※3土地利用計画を整えてかかるならば、まだまだ都市と農村が融和し一体化した町づくりの可能性がある。

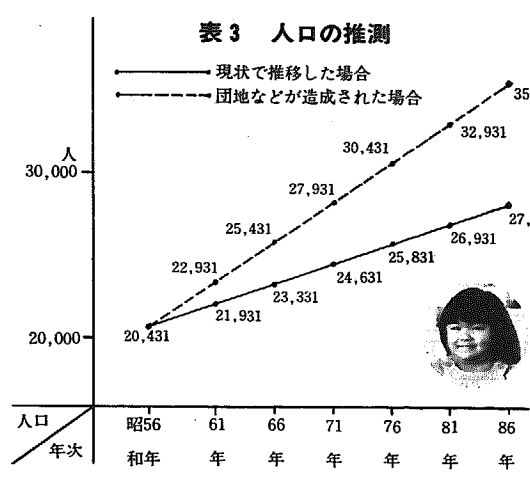
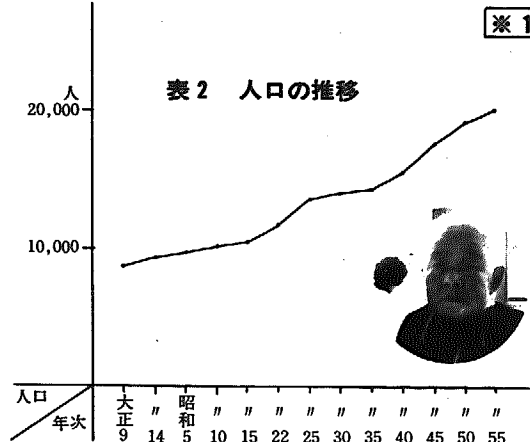
黒埼町八十年の歴史でながめるとき、人口一万人の時代がほぼ六十年、激増の時代が十年とみることもできる。そして今、それと気付くものは人口二万人の町である。それは単に数量的変化に限らず質的変化である。新しき酒は新しき皮袋にも入れなければ、豊かで芳醇な香りを発つことにはなるまい。

さらに人口二万人の町は三十年後を見通しても三万人前後の町を予想することができる。とすれば、かつての黒埼町は量的にも質的にも三倍もの転換をはかななければならぬ。三倍以上の主体的な努力がなければ、将来の幸せには通じない。

これまでは、やや後進の黒埼町であつた。全国的にその傾向はあり、やむを得ないものもあつた。黒埼町についてみれば、国道バイパス、高速道路、新幹線などおおよそ出そろつたものは出そろつた。現段階で、三十年後の計画をもつことは、かえつて着実具体的なものになりうる。

そこに、新しい「コミュニティ（地域社会）」としての「町づくり」が今から展開しなければならぬ。必然性がある。

新しい黒埼町は、従来の「〇もん」「在郷もん」「大野もん」と呼ばれるような農村と町ではない。新潟市と深いかわりのある都市と農村の新たな共存と調和、

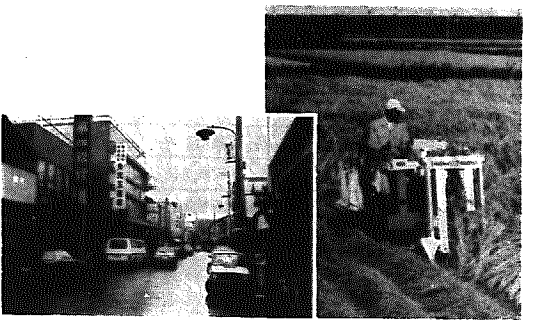
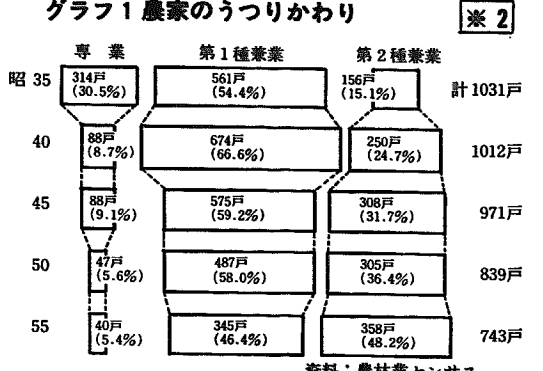


二、新しい「コミュニティ（地域社会）」としての黒埼町の「町づくり」

都市と農村が共存し連帯する地域社会を「コミュニティ」とみるならば、黒埼町役場は中央集主義という意味でなく、黒埼町の機能を統合する庁舎が期待される。その意味では、どこにどのような庁舎が建設されるかによって、黒埼町の顔は決まり、黒埼町全体の性格も決まってくるであろう。

黒埼町の将来を見とおす場合、理想的には、二〇ヘクタール程度の広さと黒埼町の中心部ということが考えられる。それには、県道内野線の南側の地域が考えられるが、人口密集度の関係から三十年後あたりまでを見通しても、やや不便なのではないかと考えられる。この地域の利用は新潟市との関連で考えてゆけば十分に活用されるであろうから、死角にしないよう利用する。

次は、逆に現庁舎とのかかわり、人口集中地域とのかかわりで考えれば、「大野町」周辺が考えられる。これは、現段階からみても人口増住宅地の形成の傾向から住民の利便さはあるにしても、近い将来に必ず狭く感じるだろうから、現庁舎、「大野町」にこだわることでは得策ではない。機能と交通、自動車を考えて、二〇ヘクタール程度の取得は無理であるにしても、できる限り広い用地の取得できる地域、それは、「大野町」を中心に現在の集中地域とこれから集中の予想される接点の地域を考え



※5 黒埼町の商店経営者の考えは？

表4 今後の経営方針 (単位：%)

店舗の改装・改築	19.4
専門店化する	18.6
複合化する	2.3
共同店舗をつくる	1.6
多店舗化する	3.1
移転する	5.4
チェーン店に加盟する	0.4
外売りを多くする	11.6
廃業	0
現状維持	35.6
その他	1.6
計	100.0

(経営実態調査)

表5 当面している問題点 (単位：%)

経費の増加	35.5
大型店の影響	56.2
他市町村への購買力流出	26.4
立地条件の悪化	43.8
駐車場の難化	26.4
店舗の老朽化	41.3
後継者の増加	19.8
店舗の求人在庫	9.9
売掛金の滞り	5.8
過剰在庫	7.4
交通規制	3.3
その他	15.7
計	4.1
計	295.9

(経営実態調査)

「新潟、黒埼インター」が将来を象徴している（「インター」相互に關係する、かかわり合う）

今後、都市と農村との融和、一体化は急速に進むだろうし、進めなければならぬ。黒埼町には都市の利便さと活力、農村の緑とやすらぎの共有できる余地がある。そうした共通の地域を田園都市と呼び、あるいはその手法として、「コミュニティ」と呼ぶのである。

三、黒埼町の「コミュニティ」づくりあるいは「町づくり」と役場庁舎

黒埼町の将来の望ましい姿の構想として、田園都市、コミュニティづくり、町づくりが考えられ

相互依存の黒埼町が期待される。二十年位は、転換の時代であり、試行錯誤もあつたであろうけれども、今からはかなり体系的な「町づくり」が準備されなければならない。田園都市としての黒埼町の新しい「町づくり」をあえて「コミュニティ」づくりというの、三十年あるいはその先にも有効にはたらきかけるものとして、とりあげるからである。

これからは、都市と農村をしっかりと別することが無意味になってくる。ここでいう都市と農村の区別は従来の、「大野町」とか、「在郷」というものではない。新潟市と黒埼町の関係で都市と農村というのではない。広く黒埼町、新潟市の生活圏を予想している。例えば、

「新潟、黒埼インター」が将来を象徴している（「インター」相互に關係する、かかわり合う）

今後、都市と農村との融和、一体化は急速に進むだろうし、進めなければならぬ。黒埼町には都市の利便さと活力、農村の緑とやすらぎの共有できる余地がある。そうした共通の地域を田園都市と呼び、あるいはその手法として、「コミュニティ」と呼ぶのである。

三、黒埼町の「コミュニティ」づくりあるいは「町づくり」と役場庁舎

黒埼町の将来の望ましい姿の構想として、田園都市、コミュニティづくり、町づくりが考えられ

る。それを具体的に裏付ける手法は※4各論でとりあげることにする。

今ここでとりあげておかなければならないのは、役場庁舎建設とのかかわりである。「コミュニティ」づくり、「町づくり」の問題は行政も、地域住民も、ともに主体的にとりあげ共通の課題とされなければならない。ともすると地域住民と行政との連携がうまくいって来たとは言いきれない。文句があつても、行政がやるべきだと、それがやられてくれるものだという待ちの姿勢が強かつた。そのよい例が、※5「大野町」商店街の姿である。このままで推移するならば、衰微の一路をたどるだろう、それはだれがするのではない。

黒埼町の将来の望ましい姿として、「コミュニティ」の様相が考えられるとすれば、役場庁舎はコミュニティセンターとしての姿が有効である。

都市と農村が共存し連帯する地域社会を「コミュニティ」とみるならば、黒埼町役場は中央集主義という意味でなく、黒埼町の機能を統合する庁舎が期待される。その意味では、どこにどのような庁舎が建設されるかによって、黒埼町の顔は決まり、黒埼町全体の性格も決まってくるであろう。

黒埼町の将来を見とおす場合、理想的には、二〇ヘクタール程度の広さと黒埼町の中心部ということが考えられる。それには、県道内野線の南側の地域が考えられるが、人口密集度の関係から三十年後あたりまでを見通しても、やや不便なのではないかと考えられる。この地域の利用は新潟市との関連で考えてゆけば十分に活用されるであろうから、死角にしないよう利用する。

次は、逆に現庁舎とのかかわり、人口集中地域とのかかわりで考えれば、「大野町」周辺が考えられる。これは、現段階からみても人口増住宅地の形成の傾向から住民の利便さはあるにしても、近い将来に必ず狭く感じるだろうから、現庁舎、「大野町」にこだわることでは得策ではない。機能と交通、自動車を考えて、二〇ヘクタール程度の取得は無理であるにしても、できる限り広い用地の取得できる地域、それは、「大野町」を中心に現在の集中地域とこれから集中の予想される接点の地域を考え

（次ページへ続く）